令和５年５月31日

横浜市立富岡小学校

学校だより ６月号

青空のもとの“原風景”

副校長　　雨宮　端

５月２７日。晴れやかな青空のもと、「とみおか 150 三色対抗運動会」を開催いたしました。長きにわたり教育環境に多大な影響を及ぼしてきた新型コロナウィルス感染症への対策が、この５月でようやく一つの区切りを迎えた中で行われた運動会。日頃から教育活動を支えてくださっている多くの方々に見守られる中で、主役の子どもたちが何に気兼ねすることもなく、ありったけの声で仲間に声援を送り、自分のもてる力を精一杯発揮して演技や競技に打ち込むことができた今年の運動会は、学校に携わるすべての方々が待ち望んでいた「原風景」だったのではないでしょうか。保護者・地域の皆様にも人数制限を設けることなくご来場いただけたこと、無事運動会を実施できたことは、学校としてほっと胸をなでおろすことができた瞬間でした。また、150 周年実行委員会の皆様より寄贈していただいた至極の法被と鉢巻は、今後、富小に長く引き継がれてゆく新たな伝統となるでしょう。本当にありがとうございました。

運動会本番での子どもたちの躍動ぶりは、多くの方々にご覧いただけたことと思います。今回は、いかにして当日本番を迎えたのか、そこに至るまでの子どもたちと教職員たちのサイドストーリーを少しだけ、お話したいと思います。

今年は 150 周年という特別な年であり、４月の早くから、掲示物やセリフ等その一つ一つに「何としてもこの記念すべき運動会を成功させたい！」という熱気が、あちらこちらであふれていました。例えば、中学年の団体演技「エイサー」の指導の一場面。３・４年生みんなで「富岡ぁー、150 周年！」「おめでとう！！」と声をそろえてお祝いする場面が組み込まれていたのですが、迫力ある太鼓の音に比べて、みんなの声が出ていないと感じた学年職員が檄（げき）を飛ばします。「あなたたちの富岡小を祝う気持ちはそんなものですか？」…すると、どうでしょう。子どもたちからは見違えるほど気持ちのこもった「おめでとうー！！」が返ってきて、学校中にこだまします。

またある時は、全校応援練習での一コマ。応援団担当職員によるうちわを使った応援指導で、「ポイントは２つ。うちわをたたくときは必ず頭の上で。それと最後の「オー！」に合わせて“面”をこちら（朝礼台）にしっかり見せて！」…すると、バラバラだった各組の応援に、たちまち押し寄せるうねりのような一体感が生まれました。

そして、低中高それぞれが積み重ねてきた演技を互いに発表し合う本番直前の恒例「最後の見合い」にもドラマが。低・中学年がいざ、ラストダンスを始めようとすると、それを見守る高学年から自然発生的に生まれた温かな拍手と「がんばれ～」と背中を押すエールが、下級生を包み込みます。その頼もしきリーダーシップに心打たれる低中学年の職員たち。すかさず高学年職員が価値付けます。「（高学年の）君たちは、先生からこうやれと言われたから（下の子たちを）励ましたの？」「ちがいます！（自分たちで気づいて！）」「そうだよね。そういう気持ちでいれば、運動会はきっと大成功するよ。」――――

今度は、低学年の子が高学年の富小ソーランを見終えた感想の場面で「かっこよかった…」とポツリ。短い言葉の中に積まった憧れの気持ち。それを受けた高学年約 200 人から一斉に「ありがとうぉー！」の特大返事が。見ていて本当に込み上げてくるものがありました。こうして伝統は受け継がれてゆくのです。「歴史に残る運動会にする！」前夜の高学年６教室の黒板には、どのクラスもビッシリと運動会への子どもたちの熱い思いが書き込まれていました。。。

紹介したのはほんのごく一部。とてもここには書ききれないストーリーがプログラムの数だけあります。職員による仕掛けと、その期待に応えようとする子どもたちの成長の連続。その積み重ねの果てに当日の大成功があるのです。当日も数多くのドラマが散りばめられていました。団体競技に敗れ、悔しいはずの敗者が勝者に拍手を贈る姿。低学年のチェッコリを応援席で一緒に踊る高学年。騎馬戦大将騎の口上に、憧れをもって「オー！」と共に叫ぶ中学年の子たち…ハイライトは、挙げれば切りがありません。

私もこの一か月は、職員室で仕事をしていて、気づけばついつい運動場を眺めてしまっていました。教育の現場に生まれる空気感が少しでも伝わっていたら幸いです。運動会へのご支援ご協力、多くの方々にご来場ご声援をいただきまして、誠にありがとうございました。